

だった。土間に筵を敷いただけの作業場、冬は寒さで手足の先が痺れる。体は綿入れの衣服で暖をとった。夏場は蚊攻めのつらいこと、手も足も鹿子のように脹れて痛痒い。「モロ木」を燻べて煙で追い出す蚊退治。それでも出来上がる楽しみはなんともたとえようがない。

積出しは「モッコ」に二俵宛、天秤棒で担いで車の通る道まで運び出す。肩車に十五俵位積んで、足と力を頼りに道幅の狭い谷間の山道、グネグネ曲がった二里の道のりは一日二往復が限度だった。南稻八妻の急坂の峠を



白土運搬用具の皿籠



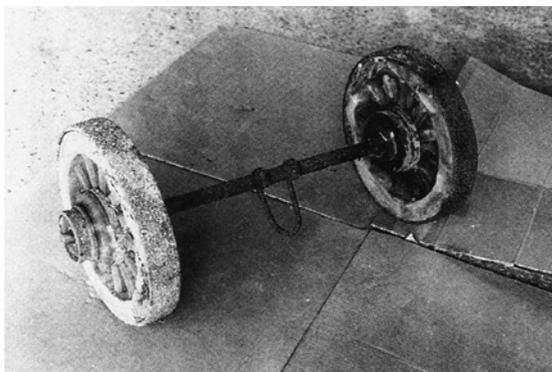
白土運搬用具のもっことわらじ

越すのが大変、石橋を渡れば小上がりが続き力が入って難行が始まった。二、三人協力しあい車の後押し、肩車一台宛峠の頂上へ、ここで山から湧き出た冷水で、汗のあとの喉を潤す。なんともいえない美味しさだった。小憩後、峠の下りがこれまた大変。急坂のため危険千万、注意していても車の下敷きになる恐れがある。汗で顔はクシャクシャ、行き先は菅井の浜、木津川の港である。

単に白土の荷出しのことを「浜行き」と、あいことばで呼んだほど、ここから帆かけ舟で各地に搬送された。



肩車の車輪



同上（悪路用）



ふじで覆われた昔日の石橋

当時、東畑から菅井の精華高等小学校に通学していた学童は、朝早く起き、登校の傍ら白土の荷出しを家計の一助にと汗を流した。十三、四歳の少年、成長盛りの子供が親の手助けをすることは珍しいことでもなんでもなかった。日常家庭の躰であり努めでもあったのである。お弁当は柳行李か竹行李の中へ麦ごはんに沢庵三切れ、または梅干し一つの日の丸弁当と相場は決まっております、氷のように冷たくなくても何の不足もなかった。皆協力し合って、根の限り働き、歩きながらも勉強したものだ。

当時の白土採掘業者は六戸、農業と並ぶ財貨獲得の大きな収入源であった。苦難の道を辿りながらも白土製造の恩恵は、図りしれないものがあり、農繁期、農閑期を問わず、穴掘りに就職先を求めて倒れるまで働き通したのが先人の姿である。

こうして汗まみれになりながら働き、ますます豊かな農村地帯として繁栄の道を歩んだのである。

この埋蔵の宝は何万年か昔、東畑一帯から田辺町普賢寺にわたり湖沼地帯であったのが、時代を経、重なり合い沈澱して層が出来たといわれている。

それは自然が創った神秘的な芸術の階層に分かれ、表層より荒粉、中粉、極微粉（通称・アオキ粉）と大体三段階に積み重なっている。それらは用途別に応じた種々の研磨粉として全国に出荷されていた。

身近では精米の精白用として荒粉の需用が多かった。今でも白土を採掘すれば、塊の中に木の炭化したもの、いろいろな貝類、木の葉の形をしたものが数限り無く、まるで歴史の証人であるかのように出て来る。

終戦前の一時期、セメントの混合（砲弾の研磨用）として出荷されていたようであるが、戦後は化学製品に市場を獲得され、今は廃窟、蝙蝠の巣窟になっているのも時代の変遷である。



民家を残すまいとたいた古

「山奥、山奥」と、渾名で呼ばれた山間僻地の集落東畑にもついに、国鉄祝園駅、奈良電山田川駅「バス」折り返し運転が始まる。三年の日時を費やし開通の偉業をなし遂げた婦人の執念、過疎の集落に歯止めをかけた婦人の努力、エネルギーを燃焼しつくした婦人の団結力、山間住民の持ち味を生かした忍耐、根性は白土採掘の苦闘の嵐の中で培われてきたのではなからうかとさえ思う。「過去に目を閉じるものは盲目となる。前事を忘れず後事の師とする」の通り、青春のあらゆる情熱を傾け生涯のすべてを、山村開花に貢献された先人の血と汗と涙の結晶、この足跡を素直に学び、いかに時代が変わろうと不屈の精神、万古不易のものを貫く事を忘れてはならない。

流した汗は豊かな収穫を約束するものだ。

先人が培って来た永い苦難の生活の歴史も、今、繁栄の流れの中に埋もれ忘れ去られようとするとき、改めて一片の清涼剤として、先人の輝かしい勤労の神髄にも触れ、絶えず優れた文化の創造へと新しい時代に向かって前進を続けることは、現代に生きるものの努めではなからうか、と苦言を呈して筆を擱く。